

昭和39年3月卒業

第34期

昭和37年秋季～38年夏季



チーム紹介

守備誇る内・外野

監督 太田 久

四季の彩りを忘れ、吐血奮闘の精神を、練習に打ちこまねば試合には断じて勝てない。我がチームのバックボーンがこれである。

主戦簾内、リリーフ渡辺は、好捕手谷内との呼吸もよく、渡辺、山田、菊谷、中田でしめる内野陣、畠山（武田）田村、岩井の外野陣とあいまって守備面では、県内A級といつても過言ではない。とくに谷内の強肩、中田、菊谷の頭脳的なプレーがしばしばピンチを救ってきた。打撃面では、斬り込み隊の1番岩井、2番菊谷に続いて、田村、谷内、山田でトリオをしめている。下位には好打者の簾内、渡辺がおりどこからでも打てる打順が強味である。代打陣の豊富なことも今までにない強味。春からの我がチームの合言葉は、今年こそ「打てぬ能高」「簾内の能高」の汚名を返上する事ただそれだけであった。

◎昭和37年

・秋季県北

能代0-1大館工

◎昭和38年

・春季県北

能代10-2大館鳳鳴

部長	小笠原 恒太郎
監督	太田 久
(投)	簾内 政雄③
(捕)	谷内 五郎③
(一)	佐々木 幸綱②
(二)	山田 勤③
◎(三)	菊谷 良己③
(遊)	中田 満③
(左)	畠山 洪喜②
(中)	田村 進③
(右)	岩井 聰③
補	武田 弘二③
"	渡辺 節朗②
"	米沢 正裕②
"	宮腰 信也③
"	小林 敬一③

能代1-0能代工

能代10-0十和田

決勝 能代12-0花岡工

・全県選抜

能代4-1横手工

能代0-1大曲農

・能代選抜

能代0-1本荘

(延長14回、簾内21個の三振を奪う)

・第45回全県大会（31校出場）

能代3-0秋田市立

能代8-0五城目

能代3-2鷹巣農

能代1-1秋田商

再試合 能代4-2秋田商

決勝 能代6-4大曲農

能代	0	0	0	1	3	1	0	0	1	6
大曲農	0	0	0	0	2	0	2	0	0	4

(能代) 簾内一谷内

(大曲農) 藤井・千葉一宮田

・第45回甲子園大会

第一試合 能代12-1長浜北

能代	4	2	5	0	1	0	0	0	0	12
長浜北	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1

(能代) 簾内一谷内

(長浜北) 八木・南部一岡本

第二試合 能代1-5岡山東商

能代	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
岡山東商	0	0	0	0	2	3	0	0	X	5

(能代) 簾内・渡辺・簾内一谷内

(岡山東商) 鳥越一木曾

〈部長〉 小笠原恒太郎

〈監督〉 太田 久

〈部員〉 3年生

◎菊谷 良己	中田 満
岩井 聰	宮腰 信也
太田 昇	山田 勤
小林 敬一	簾内 政雄
武田 弘二	谷内 五郎
田村 進	熊谷 元之

甲子園の想い出

主将 菊 谷 良 己

昭和38年夏、我々は遂に夢にまでみた甲子園出場を果たした。昭和38年7月29日付、北羽新報の論説を引用し、当時を振り返ってみる。

でかしたぞ能高ナイン。

万才、万才。ついに勝った。おめでとう能代高校ナイン。よくやった能代高校ナイン。でかしたぞ能代高校ナイン。きみたちもわれわれも長い間夢にまで描いた能代健児の“甲子園出場”がついにきみたちの手で成しとげられたのだ。

きみたちの勝利が、本当の実力の勝利であつただけに、きみたちはいま勝利とは、いかにさわやかなものであるかを、しみじみとかみしめていることだろう。また、それによって、この数日来の戦塵はさっぱりと洗い去られるに違いない。

さあ、今度は甲子園だ。きみたちと同じく全国からすぐられた精鋭たち48ナインが、みんな8月9日の開幕を目指して甲子園への道を歩きつづけているのである。高校野球児の舞台で若い力の全てを投入し、おもいっきりやってもらいたいものである。

こんどの県大会をかえりみて、きみたちの優勝が全く順当な結果とはいえ、それは淡々たるものでもなかった。戦いとは所詮けわしいものである。第1回戦では秋田市立を3対0で退け、第2戦だけは五城目高校を8対0で軽く破ったものの、準々決勝は鷹巣農に苦戦、結局3

対2で逆転勝ちはしたが、簾内投手の食あたりがわざわいしたとはいえ全くはらはらさせられた。しかし、この一戦でわれわれは能代高校ナインの秘める反発力の存在を知った。われわれの概念に抱いていた能代高校チームというのは相手に先取点をとられると、いわゆる“けちよん”をしてしまう傾向があった。少なくとも今大会までの前まではいつも試合もファイトマン太田監督だけが踊っているようで、選手たちとの間に気合いの上の断層が感じられてならなかった。ところが対鷹巣農戦を境にして、各選手の闘志が見ちがえるように燃えあがっていることを実証した。選手と監督が必勝の火の玉になったわけである。全くみごとな変身ぶりから、われわれも“これは勝てる”と確信するにいたった。だから、準決勝における対秋商戦、決勝の大曲農業戦にも簾内投手さえ崩れなければ絶対勝てるという気になった。案の定優勝候補の最も右翼とみられた強豪秋商は4対2で抛り、その歴戦の苦労もものともせず最終戦では今春の県代表校大曲農業を6対4で撃破して大優勝旗を能代市にもちかえったわけである。

高校野球に限らず能代市民には従来なにつけても二流意識がつきまとった。それをすっぱりときりすてて見せたところにも今回の優勝の意義がある。あるいは最高の価値はそこにあるとみたい。能代は野球は弱いが体操だけはどうお国自慢がそもそも哀しい劣等感であったが、今後は高校野球も能代の看板に書き加えてほしいものである。能代高校ナインが作ってくれた“新しい歴史”を高く高く評価すべきである。

こうして我々は8月1日勇躍甲子園に出発し、本大会一番乗りとなり抽選会（8月7日）、開会式（8月9日）まで、連日尼ヶ崎市営球場で練習、調整をした。また、この間、近畿秋田県人会主催の選手激励会が開かれ、神戸牛のすき焼きに舌つづみをうつたり、大阪球場でのプロ野球ナイターを観戦しその力強さや全てのスピードに驚いたものである。県大会は暑さとの戦いでもあったが、甲子

園に乗り込んでからの練習も暑さとの戦いであつた。特に夜のムシ暑さには閉口したものである。

さて8月7日の抽選会で、1回戦の相手校は3日目滋賀県代表の長浜北高校と決まったが、使用球場が西宮球場となり待望の甲子園での試合ができるに、主将としてチームメイトに対し責任を感じたものであった（結局2回戦、そして勝っていれば3回戦も西宮球場であった）。

この年は故平川民治先生が我々のチームを育てるために、7月からグラウンドに顔を出してはアドバイスをしてくださっていたが、本大会にはヘッドコーチとして寝食を共にし、本当に心から一人一人に根気よく指導をなされていた。その平川先生が、「諸君が初出場だから入場式に出ただけで満足だとか、1回戦に勝てば恥ずかしくないというような根性でここに来たとしたら、私は仕事を投げて諸君に手伝いに来た理由もなくなるし、また来る必要もない。私は学生時代甲子園には出ているし、特に四高時代は全国大会に近畿代表として出場して、ここで優勝した経験もあるので、今さら何も甲子園を見るために来たのではない。諸君が優勝を目指すことに手伝いに来たのだ」とくり返しミーティングで話され、ともすれば緩みがちな我々の気持ちを引き締めてくださった。

こうして迎えた1回戦は、雨で一日おあずけをくったいらだちをたたきつけたように打線が爆発、13安打12対1と楽勝。センターポールに揚がる濃紫の校旗をあおぎ、力強くうたわれる校歌を聞いた時、練習のつらさや、県大会の苦しみはみんな忘れ、野球をやっていて本当に良かった、太田監督さん本当にありがとうと思ったものだ。あの感激は入場式の感激とともに一生忘れないだろう。

2回戦は岡山県代表の岡山東商校と対戦することになった。しかし1回戦に勝った喜びとともに一抹の不安もあった。エース簾内の肩の調子が悪いとの報告である。球威のない簾内は前半から岡山東商に攻められたが好守でなんとかなりたてていた。右わき下を痛みどめの注射でおさえて力投したが、6回までに計5点をとられ戦況は我々に不利に進み、8回によく1点を返したが結局

1対5で敗れてしまった。当時の朝日新聞の“甲子園だより”に自分は次のように話している。「ついに岡山東商に敗れた。みんなよくやってくれた。欲をいえば甲子園で試合をしたかった。開会式の感激、長浜北戦の勝利の一瞬は一生の思い出となるだろう。8回の二塁打が郷里へのおみやげになる。敗れたとはいえ全力を出してプレーできただけに気持ちがよい。今夜はぐっすり休むつもりだ。ボクたちは3年生なので卒業だが、今の2年生たちで来年も甲子園に来てほしいものだ。渡辺、畠山、米沢、佐々木、大谷と素質のある選手がいるのできっとやってくれると思う。ボクたちのときよりもよい成績をあげてくれるだろう。能代高校野球部の歴史に輝かしい一ページを書き加えてほしいものだ」。

実際この選手たちが最上級生となった翌年は、東北大会初優勝、国体初出場と輝かしい戦績をほこっている。惜しくも夏の大会は西奥羽大会決勝戦で秋田工に敗れてしまったが、この決勝戦は今もって頭から離れない壮烈な試合であった。このチームがもしも甲子園に出場していたら、ベスト4以上と今でも信じている。

太田監督は我々に対し、真正面から、野球を通じて人間形成の指導にあたられた。練習の厳しさは今も体にしみついている。「へタな者が相手に勝とうと思うなら相手の倍は練習するものだ」と正月も何もなく練習に明け暮れた。また、“チームおよび選手精神”的小冊子を自ら作られ、攻撃精神・チームワーク・野球愛と野球部愛、そして「元気は真に高校野球の生命である」と指導して下さった。社会人になってからもこの教えのおかげで、何事にも逃げることなく真正面からとりくむことができている。本当に心から感謝申し上げる次第である。また、当時指導にあたられた部長、コーチ、諸先輩、諸先生の皆様には、今この紙面を借りてあらためてお礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。

能代高校硬式野球部も我々以降さらに3度甲子園出場を果たしているが、今後も5度、10度と出場してほしいのはもちろん、全国大会での勝利

数を伸ばし、さらに我々の目の黒いうちにぜひ全国制覇を成しとげてほしいものである。学校創立70周年にあたり、能高野球部のOBの一員として、母校の発展とともに愛する野球部のさらなる発展を期待してやまないものである。

—創立70周年記念誌より—

栄冠は君に 「母校贊歌」 より

雲はわき 光りあふれて 天高く 純白のたまきようぞ飛ぶ

青春のエネルギーが爆発した第45回全国高校野球。あの夏の日の感激を太田監督は、生涯忘れはしないだろう。



高らかなファンファーレがマンモススタンドに響き渡る。さあ、青春ドラマの開幕だ。

“熱と意氣”——心をふるいたたせるあの大会行進曲にのって選手入場が始まった。予選を勝ち抜いた各県の若人たち。

南から北へ。45番目、わが能代高ナインの姿が見えた。真っ黒く日焼けしたりりしい顔、顔、顔。ひとり大きき拍手がわき上がった。

「ああ、よぐもまあ、ここまでできたもんだな」感無量の太田監督。涙を知らない太田監督も、この時ばかりは目に光るものがあった。

春の花、秋のもみじを忘れ、ただひたすら甲子園目指した。そして開校以来38年目にして初めて果たすことが出来た夏の甲子園出場。

「夢に見だ甲子園。ホントに来たど——」米沢正裕（第35期、能代市役所）は、声の限り空へ叫んだ。

2年生の米沢は、入場行進に参加できなかった。

スタンドから、精いっぱい拍手を送った。

戦前の能中野球部は、平川民治監督を迎えて、華やかな黄金時代を築きあげた。戦時中も、佐々木満（15期）らが、地下タビ姿で白球を追った。

彼こそ、母校の監督に最もふさわしい男だ——太田監督に白羽の矢をたてたのは、先輩の牛丸幸也（19期）、小笠原恒太郎先生（9期）たちである。

太田監督は、明大野球部時代すでに同大新人チームの監督をやっていたベテラン。

「よしきた。三年間がんばって、甲子園さ行ぐべし」

それが昭和35年春。三年後の38年、見事に目標を達した。さすが、というほかない。

「選手精神の第一は、野球愛であり、野球部愛である」太田監督はこれを特に強調した。“愛”はあくまで真剣でなければならない……“人間太田監督”的信念である。練習の厳しさは、あまりにも有名だ。いまも変わらない。

打つ、投げる……そうした基本練習の2倍、3倍もの時間、選手たちはランニングに汗を流した。夜になって、ベースが見えなくなても、走り続けた。歯をくいしばってトレーニングに耐えた。何時間走れば、やめていいのか、監督しか知らない。もうやめ、と監督がいついかわからない練習を“テキサス・ルール”と選手が名付けた。

合宿で、全員がそろって食事をする時、必ず次のようにいってからハシを持った。

「熱と力と団結がオレたちのすべてだ。いただきまーす」

さて、あの甲子園大会。太田監督は、三たび涙があふれた。

選手の晴姿を目の前にした開会式のシーン。

一回戦で長浜北に12対1で大勝、センターポールに校旗が高くひるがえった時。

「太田久がんばれ」

スタンドに大きなぼりを目にした時。

これは、同期の梅田時春、浅野政和、菊地功、田中仁純、落合士郎らが贈った“友情のぼり”だった。

2回戦で岡山東に敗れはしたもの、簾内はじめ